会報 松風

No. 17
平成 5. 10. 1

・松陰敬仰の気運醸成
・松陰精神の継承普及
・松陰教学の研究振興

○編集発行　財団法人松風会
〒753　山口市大手町２－18
山口県教育会館内 TEL 0839 (22) 1218

吉田松陰の「青春彷徨」

山口女子大学名誉教授
松風会理事　河村太市

青年期は、自己同一性の獲得を課題とする時期である。そのためには、自己をみつめつつ進路を選択し、それに立ち向かっていく努力が求められる。この選択と努力の過程は、H・ヘッセを借りていえば、「青春彷徨」（「ペーター・カーメンチント」の山下　肇訳）だといえよう。

松陰は吉田家を継ぐことによって藩校明倫館の兵学師範となる路線に乗せられる。その進路決定はまさしく他律的であった。以後、玉木文之進や養父吉田大助の高弟たちの指導によく応えつつ、弘化四年（一八四七）十八歳の折りには、「吾れの自ら処るは当に学者を以てすべし。……又当に武士を以てすべし」（「寡欲録」）と、自分の進路を明確に表明する。そこには他律的なものから主体的な進路決定（立志）への転換がみられる。翌年には十九歳で独立の師範となっている。

松陰の人となりについては、兎角、他律的に決められている路線を、周囲の人びとの期待通りにまっしぐらに進んだのであって、そこには選択上の迷いをもたない、つまり「彷徨」のない担々とした青年期だったと思われがちである。だが松陰の青春も、彼が優れた資質の人物だっただけに、そこにはひと一倍惑い多い彷徨の軌跡があったと思われる。

『未忍焚稿』、『未焚稿』には、弘化三年と四年の交、つまり十七、八歳の青春の最中で詠んだ十数首の詩が載っている。その中には、「吟人（詩人）元来閑にして事なし、且く新年を祝ひて一觶（杯）を挙ぐ」（山中新年）、などと自らを詩人として詠んでいるものもある。当時松陰は、優れた兵学師範になるべく、家学の山鹿流兵学のみならず他流をも兼修するほど兵学研究に力を傾注していた。しかし、その一方で詩文にも多大な関心を抱いていた。彼の詩文への関心の強さは、このときから六、七年も後の嘉永六年、大和の森田節斎を訪ねた際でさえ、詩文の道に進もうかどうかと迷っているのである。

だが詩文書画の類いを「頑好」として懸命に拒絶しようとする。嘉永元年（十九歳）の作と思われる「自嘲」（未忍焚稿）という詩に、「意に絶つ詩文書画の玩、／案に存す甲越孫呉の書」とある。詩文書画の心のうちでは「玩」として絶ち、机上には兵学の書が置かれているのであるが、なかなか詩文への絶ちがたい思いのあることを自嘲しているのである。

ここにおいて、松陰としては、なぜ詩文書画を絶たなければならないのか、その根拠を自らに納得させなければならない。その根拠を模索する松陰の苦悩の姿を垣間みさせてくれるのが、「平田先生に与ふる書」（弘化四年、未焚稿）である。そこでは、自ら設問しながら、一つ一つその「根拠」が吟味されている。たとえば、今の学者たちは、詩というものはそれを口ずさむと、気の弱い男も奮い立ち、薄情者も情を厚くするようになる。詩とはそういう力をもつものだから、「学ばざるべからざるなり」という。この主張は是か非かと設問してみる。模索の末に、「某独り日く」として、「近人の詩を歴観するに、其の学に益あるもの十に一二を得ず、……」といったかたちで根拠を明確にするのである。このように設問しては、「某独り日く」と四回にわたって吟味を重ね、その結果、「流俗に依々として自ら樹立する能はず、学者日に浮薄に奔り、淳厚樸茂の風、地を拂へるは、実に玩物の志を喪へるに由る」という結論に達しているのである。

また時には、酒肴を携え、友を語らって観梅に出かけ、「暇を偷み間に投じ、月を吟じ花に迷ふも、苟も得ることあらば則ち亦可なり」（観梅の記）、などと青春まる出しの一夕をもったりしているのである。

松陰の青年期にみられる惑いと彷徨を指摘された方に、早くは玖村敏雄先生、近くは三輪稔夫先生などがおられる。この時期の資料は決して多いといえないが、惑いと彷徨という視点からあらためて整理してみることの必要性を痛感している。

人間吉田松陰を遺文に学ぶ

松陰研究家
松風会理事　三輪稔夫

一、正しきを以て感じる

「初めに言葉ありき」と聖書にある。子供は一歳前後までに家庭内の会話から、その意味も分からず話も出来ぬうちに、国語を基本的に身につけてしまう。

全く、人間の子は偉大な潜在力を秘めて、この世に生まれてくる。潜在力は単に言葉だけではない。音楽や美術、道徳を始め、森羅万象に接し、対象から本質的なものを抽出する感受性を具備している。

子供に取って最初の言葉は、母親の微笑である。

松陰は六歳で叔父（仲）吉田大助の死により山鹿流兵学師範家を継ぐが、三十歳の最期まで杉家の世話になった。とりわけ幼少時の山宅（松陰の生まれた団子巌と呼ぶ丘にあった狭い一軒屋を、後に松陰は山宅と書いた。）での生活は松陰の魂に消すことのできない深い影響を残した。

父杉百合之助は半士半農の貧しさに耐え、独力で家運の挽回（天保十年川島の大火災で杉家焼失）に尽力すると共に、一家の精神的感情的安定の範を示した。子供は直ちに感応して現実的態度を取るものである。

特に先祖を尊び、神明を崇め（天皇、日本国、藩主、公）、好学（兵学、儒学、毛利史、日本史等）、勤倹（農耕質素）等の美しい家風の維承と確立に努力した。（松陰は東送前、『宗族に示す書』中で祖母がその基礎を作ったと述べ、忠厚勤倹とす。）更に四・五歳（松陰）になると兄梅太郎と共に父から「四書五経の素読は、概ね田圃の間に授け了りたり」（杉恬齋先生伝）とある。

大正二年一月妹千代（児玉芳子）の回想の中で、母滝が松陰の幼い時を語った言葉に、「何処に一点小言のいひどころのない実に手のかからぬ子だと、喜んでいた」とある。また、兄弟仲の大変よかった点にも触れてある。

松陰が野山獄に帰って、自らの心の古里を思い出しながら妹千代への思いやりから、千代の長男万吉に対する養育指針を書き与えた。（安政元年十二月三日）その中に、「母の教ゆるがせにすべからず。併しその教といふも、十歳已下の小児の事なれば、言語にてさとすべきにあらず。只だ正しきを以てかんじるの外あるべからず」と、不朽の言葉が残されている。「正しきを以て感じる」とは、単なる感情ではなく、認識を伴う日本的な感性の意味である。

二、忠孝を本と為す

『杉恬齋先生伝』を見ると、父百合之助が六歳になった時から十余年間、松陰の祖父杉七兵衛は江戸藩邸に勤めた。

大変な読書好きで、長男百合之助が十歳にもならないころ、一時帰宅し、『論語朱子注』を土産として与えたと伝えられている。父はこのころから独学で『論語』を学んだと思う。

中国古代文化は今から約二五〇〇年前の春秋戦国時代に絶頂期を迎え、その中心に立った人が孔子や孟子等である。せいぜい『十八史略』に摘録されている宋代までである。『論語』は孔子やその弟子たちの言行録と見てよい。読書によって学問する場合、人間孔子や弟子が抜けて、道徳原理や知識だけでは空文に終ってしまう。どうしても人間孔子の魅力を読み取ることが大事である。

『論語・学而篇・一』は、「『詩経』や『書経』等を読んで、必要によって、何度も繰り返しておさらえする、その度にわけが深まり、自分のものとして体得される。これこそ人生の悦びではないか。学問について志を同じくする友が遠いところからやって来て、学問について話しあう、これこそ愉快なことではないか。しかしながら人生さまざまである。自分の勉強が人に認められるとは限らない。その際腹を立てないこそ、君子ではないか」と、孔子がささやいたものと思う。

父百合之助の独学はどうもこのようなものであったと感じる。『杉恬齋先生伝』に、「書を読まずして談話を事とするときは、話柄（話のたね）当に尽くべし」と、常に子弟を戒めたとある。このことから父の学問が察せられる。

次いで『学而篇・二』である。前半を省いて後半だけを示す。「君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟なる者は、其れ仁の本為る与」。この章も一章と共に難しくはない。孔子の弟子有子、すなわち有若の言葉である。

本章は父に強い印象を与えたものと思う。杉家の長男として。

しかし考えようによっては難しい。「本」とは根本にして終局のことである。かつて西晋一郎は「本」とは出発点と解してよいといった。たしかに出発点即終局点である。直線の道であれば始めと終りとは違う。円周であれば「本」に帰る。孝弟が出発点で仁が終局点となるから、仁と孝弟は別物ではない。すべて人間の一生は螺旋的に深め高める以外に道はない。

『顔淵篇・七』には国の政治が述べてある。弟子の子貢が孔子に国の政治を尋ねた。孔子の答えは、食糧の充足、軍備の充足、民が信頼の心を持つことである。

更に子貢が尋ねた。もし三つのうちどうしても捨てなければならないとすればと。孔子は軍備を捨てよと。子貢は更に問いつめた。「必ず已むことを得ずして去らば、斯の二者に於いて、何をか先にせん」と。孔子は食糧を捨てるといって、続けざまに「古えより皆な死有り。民、信無くんば立たず」と。政は有限の死よりも、「本」に当るところを信に置いている。

教、政、経済等によって「本」

が二つあるわけはない。孝弟も信でなければならない。親を信頼し、兄を信頼することが一切の生活の「本」である。

子が親を信頼する心を傷つけぬよう養えば、他日学校に行くようになれば、先生や朋友を信じ、地域や国を信ずるようになる。更に進んでは天地神明を信ずるようにもなる。

日本では信をまことと訓じ、後に誠の字を用いるようになった。

逆に親よりすれば教の「本」は慈であり、先生よりすれば生徒を慈愛せねばならぬ。慈と愛とは区別が必要である。愛は本から末に走るが、慈は孝弟と同じように反省し循環して本に帰る。

『士規七則・第一項』に「人の人たる所以は忠孝を本と為す」といい、『永訣書』では「親思ふこころにまさる親心」を、『辞世』には「吾れ今国の為に死す、死して君親に負かず。悠々たり天地の事、鑑照、明神に在り」とするゆえんである。

三、海賊を以て深憂とす

吉田家を継いでからの松陰は父や養父の志を体した叔父（季）玉木文之進から指導を受ける。

「苟も報国の念あらば慎んで凡士となること勿れ」と、口癖のように松陰を戒めた（安政三年以後、某より松陰あて書簡）。

松陰は信頼する叔父に「命のままに是れ従い唯だその及ばざらんことを恐れたり」と、千代の回顧録にある。

松陰が日本の国防問題に真剣に取り組む切っ掛けは、弘化二年十六歳も半ば過ぎたころであろう。代理教授で後見人の山田宇右衛門が江戸から『坤輿図識』（箕作省吾弘化二年著世界地理書）を買って帰り、松陰に贈って世界の形勢に注意することを促し、一派の兵学を墨守する時代でないことを説き、山田亦介を紹介したことである。識見の偉大さに感動する。

早速、村田清風の甥山田亦介に就き長沼流兵学を兼修す。翌弘化三年三月免許皆伝と、亦介の師清水赤城自筆の跋文のある『兵要録』に亦介自らの跋を加えて松陰に贈った。特に養父との親交からその志の継承、英仏列強の東洋侵略の事実と国防の急務を授けた。

当然、家学の究明から玉木文之進、山田宇右衛門はもちろん、林真人の家に寓して学ぶ。一方西洋陣法、荻野流砲術業にも及ぶ。

弘化四年十月二十七日、松陰は十八歳で林真人より大星目録の免許返伝を受けた。「返伝」とは代理教授や後見人から師家に返すことである。翌年正月独立の師家となり、家学の後見人は解かれた。

いずれにしろ、このころの松陰は人生の学問、すなわち志を樹立することに熱中した。二十歳前後の青年期の特色と考えてよい。かつての旧制高校時代が思い出される。

先祖から受け続いだ潜在的能力が、生後の適切な経験や情報によって、次第に顕在化・意識化する時期である。

弘化四年十二月九日、松陰は漢代の学者董仲舒と孫敬の逸話を読んで『自警の書』を雑録中に書き残した。

「昔、董仲舒は三年園を窺はず、孫敬は常に戸を閉せりと。古の人の其の学に於けるや勤勉刻苦すること率ね此くの如し。猶ほ何ぞ花に吟じ月に酔ひて、風人（風流人）の態を為すに暇あらんや」（この文は右半分に漢文で書き、一か所訂正、二か所挿入、左半分は本文の日付の次に、西欧の度量衡やフランス兵学の覚書き）。

なおこの文は、『孟子・尽心下・三五章』の「心を養ふは寡欲より善きはなし」から名付けた『寡欲録』の締めくくりの文として再び登場する。一か所「三年」が省いてある。またこの文になる前文に、「自ら以て俗輩と同じからずと為すは非なり、当に俗輩と同じかるべからずと為すは是なり。蓋し傲慢と奮激との分なり」とある。松陰の微妙な心の表現として、おごって人をあなどると、自らはげしく興奮するとの違いを示す誠実さが感得される。

なお同じ趣旨が、松陰の漢学指導者平田新右衛門に与えた書簡にもある。「某独り曰く」を四か所に出し、自主的な学問への志を書いて是非を判断したいとしている。

董仲舒と孫敬は、嘉永五年の『猛省録』中にも出ている。

四、歴史に残る偉大な人物

松陰は兵学者として、自ら国防問題解決のため実地に藩外踏査と同志を天下に求めて遊学に乗り出す。

最初の藩外遊を書いた『西遊日記・序』にいう。「道を学び己を成すには、古今の跡、天下の事、陋室黄巻（狭い部屋で書物を読む）にて固より足れり。豈に他に求むることあらやんや。顧ふに、人の病は思はざるのみ。則ち四方に周遊すとも何の取る所ぞと」。天下が安定している時は、読書によって修己治人でよい。「人の病」とは、一般人の欠点として読書しても思索しないことである。特に今日の危機において。これは『論語・為政篇・一五』の、「学んで思わざれば則ち罔し。思うて学ばざれば則ち殆うし」からであろう。

松陰は曰くとして続ける。「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり、機なるものは触に従ひて発し、感に遇ひて動く、発動の機は周遊の益なりと。西遊日記を作る」で終っている。

心に内容を与えるものは直接・間接の情報である。感性的情報と知性的情報をもとに決断し実行に移す。

松陰の旅は、西遊、東遊、東北遊、癸丑遊、長崎往復等、この間に触発・感動は実に多様であった。士風、人間の底辺、海防体制等が目立つ。そして最終的には、下田踏海の挙の失敗であった。

「古人の所謂事成れば王に帰し、事敗れば独り身坐すのみの心得にて、…私ども首を刎ねらるとも苦しからず覚悟の上なり」と。古人とは趙の貫高である。李単吾、『照顔録』や、『肖像自賛』中にある多くの歴史的人物に引かれて、三十歳の生涯を閉ず。

松陰先生の草莽意識

山口県立華陵高等学校　伊藤敦夫
（松陰研修塾）

はじめに

吉田松陰先生（以下、松陰と記述）に関する著作は数多く、例えば、『維新の先覚―吉田松陰』（山口県教委・生誕一五〇周年記念、昭和五五年）の参考文献欄には、実に一五〇の文献・諸資料の紹介がされている。そして、これらの刊行物により、松陰の人物評価が明治時代から今日までいろいろな立場からなされてきた。

文献等に記された人物像のうち、いわゆる左翼史観に立脚する「革命者」扱いのものが若干見られる。新しい時代を先覚することが、革命路線に結びつくという主張のようである。つまり、自らの「唯物史観」を松陰の思想と反実仮想のまま利用することにより、新しい発見と価値の創造に結びつけているかのようである。

昭和四八年に寺尾五郎氏が、『革命家　吉田松陰』を書籍として発表している。この表題は、やがて『草莽―吉田松陰』とタイトル名を変え、文庫本となっている。読後、何らかの考察をしてみる必要性を感じた。それは、革命や草莽という言葉へのこだわりであるし、松陰の思想の基調は何であるかという問いかけである。

一、考察の方法

「草莽」ないし「草莽崛起」という語句は、安政五年冬から安政六年春にかけて、書簡や著述に頻繁に登場する。時期的には、松陰自身再度の入獄であり、獄中から「伏見要駕策」による義挙の実現をめざしている。

一部研究家は、主として『己未文稿』や安政六年の書簡の一部を大々的に取り上げている。

しかし、松陰が最後に到達した思想を「草莽崛起」とするならば、辞世の『留魂録』に見られる澄みわたった人間境地が説明できないのである。また、『東行前日記』や『涙松集』の心情も汲み取ることが難解である。

私個人としては、松陰自らが草莽とそれにかかる認識を解決し、一死を賭けて至誠の方法を求めようとしたのではないかと考えている。

そこで、『松陰全集』のなかから、草莽の語義とその使用時期を考えながら、主題を考察してみたい。

二、草莽意識

「草莽」という言葉のうち、・草莽の草冠（くさかんむり）は当然のこと草むらを意味し、犬は野に群れる野犬をさしている。すなわち、〈在野の人、在野の臣〉を表現している。この言葉が初めて登場するのは、『全集』によれば、嘉永五年と思われる。『東北遊日記』の一月、萩塾居中の九月書簡（齋藤新太郎宛）、および十一月書簡（久保清太郎宛）であり、九月のものには「草茅（そうぼう）危言」とある。ただし、一月のものは遊歴中の詩に存在するものであるから「過書不保持」による塾居謹慎中の時期に何らかの思いを込めて用いたものである。

松陰の思想や教育論の形成において無視できないものは、塾居ならびに二度の獄中生活である。平時、つまり行動の自由が認められた時には、「草莽」を思わせる言辞がほとんど見あたらない。逆に、在獄といった特異な情況では、心の叫びを同志・諸友に壮烈な気迫で説いている。もちろん、その主張・説得のなかに「草莽」が含まれている。

三、草莽と階級

「草莽」の意味する階級とは具体的にどのようなものか。

基本的には在野層をさすことになるが、それは松下村塾で結ばれた同志集団を意味する。村塾の構成集団の階級（職掌）は、下級武士や足軽・中間といった陪臣、下級の商工層等である。高杉晋作のような高禄の士分階級は、極めて稀な存在である。

革命史家は草莽を西洋的な労農一致の大衆団結に求めようとしている。確かに、幕末（天保年間以降）の百姓を中心とした一揆の多発と、次代（明治時代）の関係を無視することはできないであろう。松陰の勧農精神も書簡等に表現されたとおり、従来の武門階級者とは相違する。しかし、松陰の末期、安政年間の時点で、万民による崛起を実現しようとしたとするのは、早計であろう。「草莽」を階級概念から、意識概念への充実に深化させようとしていた段階に留めるべきではないか。

山鹿流師範を継承すべき存在の松陰は、英才教育を受動的に施されながらも、遊学等で体得した自己教育により、人格の陶冶を実現した。それは、身分による集団形成を是とするのではなく、旧来とは相違する組織集団に「草莽」の可能性を見出している。

師範として明倫館門下生を教育することに始まり、松下村塾での私塾教育、そして塾の同志的結合は、新しい時代における教育者を形成する組織を夢見ていたはずである。

例えば、嘉永元年の『明倫館御再興ニ付気附書』のなかで、「太平久敷く候へば、……」という形式で幾条かの教戒を上書したということは、旧来の形式論を脱皮する必要を述べている。また、安政年間に見られる明倫館時代の門生批判や、旧師（平田新右衛門など）への憤りが書簡等に見られる。これは、三民の長たる士分階級への自省と、到来するであろう新時代への予見とも言うべきものであり、

「草莽意識」の高まりにもつながる。

四、草莽と忠誠

前項で、「草莽」という語句が特異な情況下で用いられているとした。安政五年十一月、同志十七名と老中要撃策を画策したため、周布政之助から翌十二月に再度の入獄命令が下る。入獄中に尊皇討幕をめぐって門生と「義挙論」の対立が見られ、また、「伏見要駕策」も結果的には失敗に終わった。

この段階において、松陰の義憤が激しくなる。

まず、愛弟子の野村和作・入江杉蔵に宛てた書簡（三月二十六・七日）、

「（前略）吾が少将公（毛利敬親）を諫むるの辞令かく云ふべし。『去年大晦間部参内、事勢己むを得ざるに付いては暫く御猶豫を願うて勅許なり。**然れども比の事御拒絶相成らず候ては皇道左衽と相成るは目前なり。**就いては吾が輩闕に至りて諫死せんと欲す。」（中略）只今の勢にては諸侯は勿論捌けず、公卿も捌け難し、草莽に止まるべし。併し草莽も亦力なし。天下を跋渉して百姓一揆にても起こりたる所へ付け込み奇策あるべきか。（後略）」

とある。

次に、北山安世に宛てた書簡（四月七日）には、

「（前略）濁立不羈三千年來の大日本、一朝人の羈縛を受くること、血性ある者視るに忍ぶべけんや。那波列翁を起してフレーヘードを唱へねば腹悶醫し難し。（中略）**草莽崛起の力を以て近くは本藩の力を維持し、遠くは天朝の中興を補佐し奉れば、**匹夫の諒に負くが如くなれど、神州に大功ある人と云ふべし。（後略）」

とある。

また、野村和作への書簡（四月頃）には、

「（前略）義卿、義を知る、時を待つの人に非ず。草莽崛起、豈に他人の力を假らんや。恐れながら、天朝も幕府・吾が藩も入らぬ、只だ六尺の微軀が入用。されど、**義卿豈に義に負くの人ならんや。御安心御安心。**（後略）」

以上の三つの書簡は、松陰を急進的な革命論者に誘引する原典とされているようである。文章に過激な様子を伺い知ることができるが、ある線上を越えていない。それは、天朝への忠誠であり、藩への奉公である。ゴシック部と前後の関係から、獄中という特殊な環境においても、決して自己を埋没させまいとする強い精神力が読み取れる。『書簡集』（安政六年春）、や『己未文稿』のなかにも、藩公（毛利敬親）への忠臣ぶりが記述されており、天朝への敬慕も当然のことである。兵学者になるべく純粋に教育を受け、藩への期待を背負ってきた松陰に、プロレタリア的人民主義への傾倒はできなかったのである。

「草莽」のなかには、尊皇の草莽も存在する。村尾次郎氏によれば、寛政年間に登場した蒲生君平や高山彦九郎などは、尊皇のための論者であり、憂国の心情を吐露しているとする。

蒲生や高山の思想系譜が、松陰と必ずしも軌を一にするとは思われないが、共通の接点として水戸学の存在があるため、松陰の草莽も尊皇の草莽だと判断される。天朝も幕府・吾が藩も入らぬのは、手段・方策をそれらに求めず、自己一身の力を示すことであり、愛弟子・塾生（同志）への発奮のための叫びである。当然、共産主義的な用語である無政府主状態を指向し、容認するものでは断じてない。

五、草莽と草莽崛起

松陰の書簡や著述に見られる激白は、安政六年四月下旬を以て終わり、五月十四日の東送命令を聞くことになる。長崎遊学中の佐世八十郎の謝罪文を得たことで、松陰の心に平静さが戻った。ほぼ、時を同じくして入江、野村、品川（彌二郎）に宛てた書簡には、自らの任務を遂行したかのような清澄な表現が目につく。塾生・同志に自らの心意気を託していると考えるのが適切であろう。東行を聞くと、初念を開陳できる絶好の機会だと記している。

松陰の描く「草莽」とその意識は、最終的には陋習から脱却しようとしない幕府への挑戦である。水戸学を自らの世界で発展させて越えつつも、皇室に弓を引かずとする水戸の学風は継承している。三民の長たる士分階級に戒めを求め、藩公にはかたくなに奉公を尽くそうとしている。まして、天朝を弑することなどは論外である。

松陰における「草莽」とその意識は、小禄とはいえ士分階級である杉家（吉田家）という身分階級の内側で認識をし、幽囚や獄中という特異な情況のもとで門人・塾生、ひいては最も信頼する同志への伝達である。そこには、当時の身分階級を最終的に踏破していないので、対象を下級武士と陪臣等に限定して求めるべきである。事実、松陰の遺志を継ぐ人たちの職掌階級もこうした身分を基本としている。討幕と倒幕との間にいくらかの時間的推移を考慮しなければならないのと同様に草莽崛起論では、時務に加えて再獄という事情がある。松陰が声高にして崛起を叫ぶ背景には、行動を束縛されているゆえの苦悶であると考えられる。

東行前、東行途中、そして江戸伝馬獄においても、「草莽」とか「草莽崛起」といった言葉の使用は見られない。すでに、高邁な至誠のほとばしりが、「草莽」を解決し、凌駕したと見るべきであろう。そして、師弟間の再度の盟約が暗黙のうちに結ばれた可能性を信じないわけにはおられないのである。今ここに、松陰精神の最高峰とも言うべき留魂録の世界が始まることになる。

生徒と共に学ぶ『吉田松陰を語る』セミナー学習より

山口大学教育学部
附属山口中学校　池田廣司
（松陰研修塾）

一、講座開設の思い

中学校の特別活動の内容の一つとしてクラブ活動がある。クラブ活動は、異年齢集団で共通の興味関心を追究していき、お互いに高まり合うことをねらいとしている。

本校では、クラブ活動のことを「セミナー学習」として教育課程の中に位置づけ、各教官が講座を設定し、その講座を生徒が選んで学習するという形式をとっている。

私は今年度、「吉田松陰を語る」という講座を設定した。

松陰研修塾に入ったのがきっかけであるが、松陰の生きざまは、時代を超越した価値と魅力をもっていると考えていた。

松陰の生き方を知識として学び、そのことを土台にして一人一人が自分の生き方と照らし合わせながら語り合うことができたならば意味のあることになりはしないかと思ったからである

二、様々な思いを持って集まってくる生徒

この講座では、三年生五人、二年生十四人、一年生八人の計二十七人の生徒が様々な思いを持って集まってきた。

講座を選んだ主な理由を示すと次のようになる。

・歴史上の人物を学ぶのが好きで、激動の時代に自分の信念をつらぬいた吉田松陰についてもっと知りたかった。（三女）

・一度吉田松陰の本を読み興味を持ったから。（一男）

・萩の校外学習で松陰について調べたが、もっとこの講座で深めてみたかったから。（二女）

このように、生徒一人一人がそれぞれのきっかけを持ちながら、またそれぞれの見方・考え方を持って入ってきたことは、私にとってうれしいことであった。こうして、「吉田松陰を語る」のセミナー学習がスタートした。

三、吉田松陰を語る

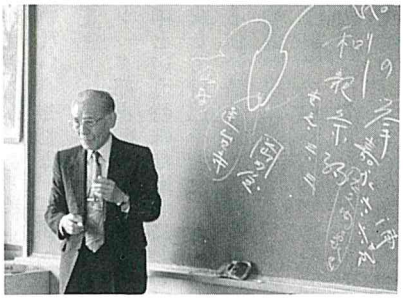
このセミナーは前期四回（一回が二時間で計八時間）と限られた時間ではあるが次のような計画でおこなった。

☆セミナー学習の計画

①五月十四日(金)…講義「野山獄での松陰の教育」
②六月十八日(金)…課題を決める課題別研究
③六月二五日(金)…三輪稔夫先生の講義／質問
④七月九日(金)…吉田松陰を語る会／一応のまとめ

一回目の講義の後、松陰の生き方の中でも、下田踏海から松下村塾で教育にあたった時代を中心にして学習していくことになった。

ペリー来航時の松陰の動き、野山獄の様子と松陰の教育、松下村塾での教育など課題を決め取り組むことにした。



三輪稔夫先生講義風景

三回目は、三輪稔夫先生に本セミナーの講師をお願いし、下田踏海の挙を中心として松陰の人間性、生き方についての幅の広い講義を拝聴した。

三輪先生の講義をきく

情熱に満ちた三輪先生の講義の後、生徒は次のような質問をした。

●生徒

松陰先生は下田踏海に失敗して、なぜ自首したのですか？

●三輪先生

それが、一つ大事なところですね。いい質問をしましたね。

とにかくうそをつかないところが松陰のすばらしい心なのです。孟子という本の中に「至誠」という言葉があります。即ち「至誠にして動かざるものは未だこれあらざるなり」ということであります。人間はうそでない真心で伝えることで、人が動かないことはないといっているのです。日本のことを真剣に考えることは至誠につながるのです。特に松陰はこのような「至誠の人」であったのです。

（以下続くが省略）

四回の学習を振り返って、ある生徒が次のような感想を書いている。

吉田松陰を語る（まとめ）

2年D組　貞末恭之

吉田松陰というと松下村塾というイメージがセミナーに入るまではあったけど、松陰の行動の一つとして下田踏海から江戸伝馬町の獄までを調べてみると松陰の心（目指したもの）の一端が見えてきた気がする。

下田踏海をした時、アメリカ船から追い返されてそれでもアメリカ、外国へ行きたいと思うのだったら、普通自首なんてしないと思う。自首したら自分の夢を自分でつぶすことになってしまうのだから。それを松陰は実行してしまうのだから正直だといえばそこまでかも知れないけど、死ぬことより自首することの方が本当は悲しかったのではないかと僕は思う。

多分、僕であったら目的を成し遂げるまでは汚いことをしてでも生き抜くことを考えるだろうからとても松陰の真似なんてできやしない。そんなことからして、やっぱり松陰はきれいな人なんだと思う。

また、松陰は一段と身分の低い人とも分けへだてなく接したし、獄にいた人達とも励まし合って生活したということから、弱者の立場にたって物事を考えられる人であったと思う。自分が武士であるのを忘れているのかなと思ったけど松陰は身分という考えの旧域を脱して新しい世界をつくっていたのではないかと思う。

（原文のまま引用）

この生徒は下田踏海から江戸伝馬町の獄までのことを中心にして調べ、その中で下田踏海に失敗した後自首していく松陰の行動を、「死ぬことよりも、自首することの方が本当は悲しかったのではないかと僕は思う」と中学生らしい感想を書いている。このことは、自分の夢が果たせなかった当時の松陰の無念さに切実な思いを寄せていると読み取れるのである。

「なぜ自首したのか」などという生徒の松陰の生き方に迫った疑問は、他の生徒にとっても大きな関心事であり、「至誠」という考えを捉えていくうえで重要な問いかけとなったのである。この松陰の「至誠」や「大和魂」を根底とした生きざまに触れるとき、生徒たちは身震いするほどの感動をおぼえたのである。

四、学習発表に向けて

本校ではセミナー学習で学んだことを、「学園祭の文化部門」で発表する機会がある。

このセミナーでは松陰の「下田踏海の挙」から「松下村塾での教育」を行う約四年間の生き方をスライド発表することになり、夏休みを利用して準備してきた。次に示す資料は、スライド発表のために計画した準備組織表である。

「吉田松陰を語る」のセミナーの発表準備組織表

一　発表形式について
スライドを写しながら、録音テープに吹き込んだ語りを流すことで発表する。

二　発表の内容
第一部　海外渡航の企て（下田踏海）
第二部　野山獄中での読書と教育
第三部　松下村塾の成立とその教育

三　発表に向けての役割分担
(一)　原稿執筆係　チーフ（山根）
まえがき（山根）
第一部　海外渡航の企て（下田踏海）（福永・森永）
第二部　野山獄中での読書と教育（吉村・木南）
第三部　松下村塾の成立とその教育（安部・大野）
おわりに（山根）
(二)　スライド準備係　チーフ（岡田）
第一部　海外渡航の企て（下田踏海）（岡田・垣内・伊藤）
第二部　野山獄中での読書と教育（脇田屋・伊藤・吉谷）
第三部　松下村塾の成立とその教育（谷・吉谷ま・福岡）
(三)　録音係　チーフ（田中）
○録音機器係（田辺・橋本・守永）
○音楽選定係（益田・国森・田中）
○朗読アナウンサー係（木村・本廣）
(四)　発表準備係　チーフ（2－D　佐伯朋子）
○紹介ポスター作成（佐伯）
○暗幕準備（田中・貞末）

四　夏休みの準備について
●八月一八日
スライド資料を選ぶ（松風会）
●八月一九日
スライド資料の確定（松風会）
●八月二四日
松陰研究（松風会）
●八月二八日
原稿執筆（松風会）

二十七名の生徒一人一人が、原稿を執筆する係、スライドを作成する係、さらに録音する係などに分かれて準備をしていくことにした。

左は「松風会事務局」にある松陰資料展示室で、参考資料をもとにどのようなスライドを作ったらよいのかを検討しているところである。

松風会での学習

スライド資料に沿って原稿を書き上げ、さらに録音して発表ができるようにするまでには、予想以上に時間がかかった。

しかし、この発表を準備する過程を通して、生徒たちは「至誠を貫いた松陰の生き方」を自分たちのからだを通して学んでいったように思う。発表は九月十七日（金）である。

木野川渡し

山陽女学園講師
藤樹研究会長
藤田　覚

この三月、五十五年前の教え子三人に案内してもらって、長年願望の、岩国市小瀬の松陰先生最後の出国時の歌碑や、維新の戦跡を訪ね説明してもらった。

「木野川渡し」の木札が、川端の五十センチの高さのコンクリート塀につけた、三又路の鏡柱に打ちつけてある。

松陰先生は、関戸からこの小瀬峠を超えて、ここで一行と渡し舟を待つ間に、護送駕籠の中でこの歌を作られたものであろう。

「歌は世につれ世は歌につれ。」というが、時代は回転した。私が「まつかげ」発刊（昭和五十八年。第十号より藤樹会員に責められて「ふじかげ」に改題。現在一一七号）当時は、松陰先生を「やさしい愛の人」とＰＲすることを第一の顕彰内容としていた。

となると、先生が度々李卓吾や方広儒を挙げて、その心情に共鳴しておられる所とずれがあり、どう対応したらよいかに困っていた。近年漸くこの両面は実は一つの根源から出た二つの現象であることで納得できた。

先生は少年時代から山鹿流の兵法を以て藩主に事える家を継ぎ政治的責任を常に自負しておられたようである。従って当然、一面では外、藩の存亡、ひいては日本の存亡に関わる厳しい対応にその心を砕き、一面ではこの心は、内、家族や国民に対するやさしい愛の対応となって現われたものと思われる。

こうした環境的思想的基盤に立つ生涯であったが故に、生来の学問好きと責任感に押し上げられて、国内各地を巡歴し、外国事情にも通じ、また素行の「中朝事実」にも合わない幕府の旧態依然たる行政、対外対応に我慢ならない所であっただろうと思われる。

こうした折から李卓吾、方広儒の純粋性と信念貫徹の俊厳さに共鳴し、大塩平八郎の太虚思想と実行性にひかれ「やむにやまれぬ大和魂」の心情表明、その実行意欲となったものと思う。

吉田松陰先生と明木橋

旭村文化財審議会委員
山本弘秋

安政元年三月二十七日夜更け、吉田松陰と金子重之助（重輔）は小船を得て、下田沖に停泊中の米鑑に乗り移り、アメリカ合衆国へ渡航の目的で交渉をしたが、ペリー提督は、「幕府の許可がない者は絶対に同行できない」と断ってしまった。ついに壮挙は失敗に帰すことになる。（この密航の企てを下田踏海という。）

二人は柿崎村の名主に事のなりゆきを告げ、自首して出た。

その後、二人は国禁を犯した咎を受け、江戸伝馬町の牢獄に収監されることとなった。

かくすればかくなるものと
知りながら
已むに已まれぬ大和魂

この詠み歌は、下田踏海をした松陰らが伝馬町の獄舎へ護送の途中、赤穂義士の泉岳寺の前を通過する際、手向けられたものである。

また別に「赤穂の諸士は主の為に仇を報じ、甘んじて都城弄兵の典を犯し、矩方は国の為に力を効し、甘んじて海外闌出の典を犯す。而して一は成り一は敗る。」と、己が壮挙と赤穂義士の義節、其の成敗をオーバラップして考えようとする遺方ない諦念でもある。

半年ののち、幕命によって松陰と重之助は江戸の獄舎から萩の野山獄に転送されることになる。安政元年九月二十三日のこと、二人を乗せた駕籠は江戸を発って萩の地へ送還される運命に遭う。

江戸を発ってから一ケ月経った十月二十三日、山峡の集落、明木市に着く。秋の日暮れは早い。この夜はここの宿場に一夜を明かす。

明木は萩往還と赤間関街道の分岐点で、古くから開けた宿場があって、松陰には多くの思い出があり、昔ながらの山河と里人のたたずまいには寂寥さえ催してくる松陰である。

嘉永三年八月二十五日、松陰は下男の新介を従え西遊（九州旅行）の途についた。ときに若冠二十一歳であった。

さて西遊の途次、中国の「蒙求」と云う古典（唐の李瀚の著）を読んだことがある。

前夜の夢寂さだかでない松陰、愈々今朝、（二十四日）は、明木宿を発ち萩への帰国である。諸々の感慨が雲の如く去来したことであろう。

明木橋を過ぎてから、殊更に脳裏に去来したのが四年前、即ち、西遊のときの思い出であった。

「蒙求」の中に出てくる漢時代の文学者、司馬相如の逸話である。

相如が郷里を出て都へ上る途中、故郷の昇仙橋（長安入口）を渡るとき、橋柱に青年らしい大志を書きつけた。「大丈夫、駟馬に乗らずんばこの橋を渡らず」（男子たる私は、四頭立ての馬車に乗る貴い身分にならなければ決してこの橋を渡らない）の意味。

昇仙橋に対する相如の志である。松陰自身、己が心に言い聞

『松風寮跡』建碑

松風寮よ永遠に

松風会理事
谷口不二彦

吉田松陰先生を偲ぶ銅像や石碑は、山口県はもちろん、東京・下田・平戸・青森……等々全国各地に数多く見られる。そして現在もなお各地で次々と建立され、松陰精神をいつまでも継承発展して行こうという気運が高揚されている。

元在寮生代表を交えて除幕

正面

右側面

左側面

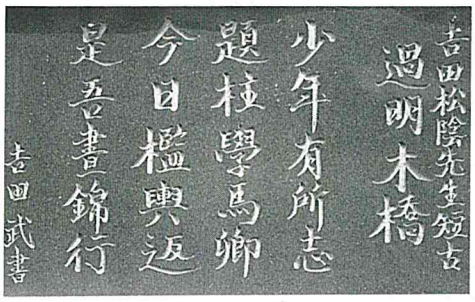
由緒ある地でも永く伝えるためには、石碑というような形で残しておかないと、いつの間にか忘れ去られてしまう恐れがある。我が財団法人松風会が主なる事業として永年運営してきた松風寮も市道改修工事に協力するため、昭和五十七年三月閉寮し、県庁裏門に通じる道路となって跡形もなくなっていた。数年前の理事会でこのことが問題となり、山本理事の提案により、ここに松風寮が存在していたことをはっきりさせる物が必要であるとして、審議の結果、跡地に記念の石碑を建立することが決議された。

経費は建設積立金があるので別に心配はない。松風寮のど真中を道路が通ったので、どこに碑を建てたらよいか藤永事務局長と私は何回か現地を訪れた。一応山側の路側帯を予想して、

かせ、其の謂に則るべく、家国の前途を憂悶し、専ら必中の信念で実践窮行してきたことが廉を受け、松陰流に云えば「去年は雲外の鶴、今日は籠中の鶏」の吾が身でしかない。

駕籠の中には、勿論、平仄も韻書もない。それは昔取った杵柄、今の心境を一詩に託した。

（五言古詩）



碑　文

少年志すところあり
柱に題して馬卿を学ぶ。
今日檻輿の返
是れ吾が書錦の行。

少年の頃、志は高く持っていた。再び明木橋を渡って帰るのは武士として名を成してからと、そのころ思ったものであった。

詩碑と第14代当主吉田　武殿

然し、今日は罪人として駕籠の中に押し込められ担がれて、苛わしい姿で明木橋を後に故郷へ向いている。だが、これこそ私の名を成して揺籃の地へ急ぐ姿であり、当に白晝、堂々として錦を着ての帰国である。と、自負する凛々しい松陰である。

江戸から護送されて、初めて二人駕籠が並べられる（明木宿）松陰は重之助と語り合うことができた。「幽囚録」（全集二巻九〇頁）の中に、その情景を窮い知ることができる一節がある。（金子重之助は、江戸出達以来ひどい下痢に悩まされ心身共に憔悴している）

『余輒ち之を慰めて曰く。「事蹶きて此に至る。命なり、命を知らざれば以て君子たることなし」と。重輔（重之助）笑いて曰く。「吾が病篤く心喪いて及ち爾り、爾後は復さじ』

「解釈」

私は重之助を慰めて「事がうまくいかず、こうなってしまったのは運命である。運命を知らなくては君子たることはできない。」と云った。重之助は笑って「私は病のため、正常な心を失っていたので怒りを発してしまいました。然し、そのようなことはもう二度と繰り返しません」と云った。

重之助の一言は松陰の心を振るわせた。これまで護送役人の態度が悪く、無情の振舞が目だったので、重之助は度々、憤り怒ったのである。それだけに「爾後は復さじ」と詫びる重之助の心情を思うだに、松陰としては胸中、裂けんばかりの子弟の愛情が大粒の涙として頬を伝うのである。

「附記」

下田踏海事件から二年後、ペリー提督は、日本訪問の記録を編した。所謂、「ペリー日本遠征記」その中で松陰と重之助は日本人の典型と云い、今後、希望に満ちた未来が開けるだろうと述べている。

市の都市計画課に話し、ある日市の職員と事務局長と私で現地を視察し建碑の位置を研究した。側溝の外側、山に登る道の角がよかろうということになる。しかし、ここは山口大神宮の駐車場に上がる通路で、市有地ではなく大神宮の土地と判明し、市とは無関係であることがわかった。

他日打ち合わせの上二人で大神宮へ行き、建碑の趣旨を話し土地借用のお願いをする。松田宮司も住時を思い出され賛同の上現地に行きいろいろ検討して下さる。そして、無償で期限なしの貸与ができるであろう、しかし、一応神社庁等の許可が必要であるとのご返事であった。

一応の見通しができたので、事務局長は松永理事長と協議の末、建設業者を決定し、設計書、見積書等を検討の上、理事長と私たち二人で大神宮に正式にお願いに参上する。現地に石碑と同大の模形を置いて検討を重ね、建碑を決定する。神社庁の許可も得られたとのことで、契約書を交換する。

直ちに着工することにし、別記文字を刻した石碑を建立した。刻字の文については、事務局長が何回も文書で各理事の意見をきき決定したもの、書は林登志雄氏に依頼したものである。

除幕式を平成五年四月三十日十三時半とし、関係者一同現地に集合、報道関係者も来場。

碑の後の側壁に紅白の幕、碑には白布をかけて用意万端整っている。理事長・山本理事、元松風寮生代表糸長寛司・梅本泰正県課長補佐の四人で除幕し、松永理事長は「ここに二十一年間六百余名の純真な学徒の殿堂松風寮が建設されていたことを松陰精神の振興と共に永遠に記念することができる。」と挨拶、在寮生代表の当時の思いを込めたことばをきき、写真撮影の後三輪理事の発声により万歳三唱をして意義ある除幕式を無事終了した。碑のそばを通る度に、青年学徒と過した往年を懐かしむ。

平成三年六月開設

第一回 松陰研修塾

―第三年次研修

第一回　平成五年五月八・九日

―講話。幕末激動期の政治変動と長州藩

前山口博物館長 松風会理事 石原啓司殿

2 研究協議

3 研究のまとめ

第二回　八月十七・十八日

1 講話。志を育てる教育

山口女子大名誉教授 松風会理事 河村太市殿

2 資料提供

。松陰における草莽意識

華陵高等学校 伊藤敦夫殿

3 テーマ別研究相談

（河村先生の講話）（五グループ）

4 研究のまとめ

第三回　平成六年二月十二日

1 記念講話

。廿一世紀を創造する知恵（智慧）を松陰に学ぶ

松陰研究家 松風会理事 三輪稔夫殿

2 修了式・座談会・記念撮影

第二回 松陰研修塾

―松陰像の追究―

募集

1 平成六年六月開設

2 年間三回・三カ年在塾研修

3 県内小・中・高等学校等教職関係者、及び特に主催者の認める者、初心者大歓迎

4 中心テキスト

人間吉田松陰の遺文に学ぶ

（松風会刊行・目下編集中）

詳細は平成六年四月に文書等で募集

第九回 松陰教学研究会

―松陰教学精神の追究―

募集

1 平成五年十二月四・五日

2 山泉荘（山口市湯田）

3 小・中・高校等管理職三十名

4 基調講話

(1) 教育目標としての立志

山口女子大名誉教授 松風会理事 河村太市殿

(2) 幕末史における松陰の果した役割

前山口博物館長 松風会理事 石原啓司殿

(3) 松陰先生の形而上学

松陰研究家 松風会理事 三輪稔夫殿

5 実践発表

松陰教学とその実践

前明倫小学校長 宇田川憲吾殿

6 情報交換・研究協議

7 申込み　十一月十日(水)までに

財団法人松風会宛

※定員に達した時点で締切りますのでお早く御連絡下さい

第二回 松下村塾に学ぶ

旧ソ連邦市場経済指導者

＝国づくりは人づくり＝

1 主催者

企業経営責任者育成セミナー

イスクラビジネス・スクール

2 期日　平成五年五月二十一日

3 参加者　ロシア・カザフ両国の若手リーダーほか十二名

（二十五歳―四十二歳）

4 指導者

松陰研究家 松風会理事 三輪稔夫殿

5 通訳

研究員コマロフ　V・N氏

6 研修内容

(1) 車中研修（松陰の生涯）

(2) 松下村塾・杉家・松陰神社

(3) 墓所・生誕地

(4) 野山獄及び岩倉獄

(5) 指月城

熱心な研修態度に敬服。帰りの車中で尾形大作歌う『吉田松陰』を繰り返し繰り返し聞き、通訳コマロフ氏が解説するなど人間松陰先生の生き方に深い感銘と強烈な示唆を得て終了。帰国後の御発展を祈る

近刊予告―平成六年―

一『人間吉田松陰の遺文に学ぶ』

＝松陰研究の基本文献＝

○内容の構成・特色

(1) 序章　松陰の生涯

(2) 重要遺文集（一五一篇）

。第一章　兵学修業　六篇

。第二章　遊学　二五篇

。第三章　野山獄・幽室四三篇

。第四章　松下村塾　三〇篇

。第五章　野山再入獄三八篇

。第六章　殉難　九篇

(3) 杉・吉田家系図・松陰年譜・遊歴地図・写真等を入れる

(4) 中国・日本の関係重要人物は、人物略伝としてまとめて解説し、特に松陰との関係に重点をおいて述べる

(5) 読みにくさの克服

ア 旧漢字をできるだけ常用漢字にする

イ 常用漢字のない旧漢字はそのまま使用し、ルビを附す

ウ 各遺文の難解語句・重要語句は、抽出して注をつける

特に松陰の遺文に即した注とすることに努力する

エ 各遺文に解説をつける

※自学研究のできるように留意し、改めて辞典を引くなどしなくてもすむように編集する

二『人間吉田松陰の足跡に学ぶ』

○生誕地の萩・短い生涯に一万三千キロにわたる遊歴の跡を遺跡・遺物等を中心に集録し、現地訪問研究の便を図る

○山口県内篇・県外篇の二部構成とし、それぞれの写真を掲載する

○取り上げた遺跡・遺物は、できるだけ松陰の遺文を附して解説し研究の深化を期する

役員異動・紹介

前理事東条孝和氏の山口県教育財団副理事長への御栄転に伴い、後任の**松風会理事**として、**山口県生涯教育センター所長**

濱本研一氏を平成五年四月にお迎えしました

前任者同様によろしくお願いいたします

〔略歴〕文部省初中局財務課勤務の後、山口県教育庁主幹・課長・参事・教育次長等を歴任

平成五年三月三十一日退職

玉稿に御厚謝、ふるっての御投稿をお待ちしています。